女神に訳アリ魔道士を押し付けられまして。

登場人物紹介
Madoshi Wo Oshitsuke Rareta Shite Megamini Wakecari
アシュリー・ノア・エイムズ
アーシアの国の一つであるエイムズ王国の第一王子。
ユノ&アルマ
神聖教会に所属する聖魔道士と聖騎士。
クレフ・リード
異世界アーシアの優秀な魔道士。ライバルに毒を盛られ、幽体状態になった。
ヒナちゃん
聖魔鳥と呼ばれる聖なる鳥の雛。寧々になついている。
エリオット・オーウェル
エイムズ王国の宮廷魔道士長補佐官。クレフに毒を盛った張本人。
ブラムス
寧々とよく出会うソロハンター。灰色オオカミを従魔としてつれている。
龍ケ崎寧々
女神によって異世界・アーシアに転移させられてしまった女子大生。クレフ・リードという男性を救ってほしいと頼まれて——

プロローグ

前後左右、真っ白な空間がどこまでも広がる場所で、私は荷物を片手に困惑していた。
大学の前期試験が終了し、試験休みに入ってはや数日。手芸用品を買った帰りに自分の誕生日ケーキも購入すべく、某チェーン店の自動ドアをくぐったはずなのに、ここはどこだ。
「……まさか、死んだ？」
死後の世界と言えば、大きな川と花畑が有名だ。ここにそんなものはないけれど、可能性はある。現実世界に、こんな場所があるとは思えなかった。
ケーキ屋に入った直後、暴走車でも突っ込んできたのかな？　で、即死。
「マジで？　マジで死んじゃったの？」
私、就職の内定は早々にゲットし、残るは被服学科最大の試練である卒業制作――ウエディングドレス作りと出席日数のクリアのみで、来年には卒業の予定だったのに？　最終話が気になる漫画や小説も読めないまま、人生終了⁉
ショックのあまり、その場にうずくまる。が、数秒後には決意と共に顔を上げた。
「……こうなったら、浮遊霊として現世に帰るしかない。でもって、誰かの横で読ませてもらう」

作家さんの印税収入に貢献できないのは申し訳ないが、死んでいる以上はどのみち買えないし。
成仏しない気満々の私、龍ケ崎寧々はオタクである。
六歳上の兄、雅兄こと雅哉が幼くしてオタクだったので、面倒見のよかった彼に遊んでもらううちに、しっかり染まってしまったのだ。
ちなみに雅兄と双子である長兄、鉄兄こと鉄哉は外遊び大好きっ子だったため、そちらの影響で我が龍ケ崎家三兄妹は、そこそこ運動が得意なオタクである。
それはともかく、どうすれば帰れるのか。とりあえず適当に歩いてみようと立ち上がったその時、キラキラと輝く虹色の光が目の前に現れた。
あっけにとられて見ていると、その光の中からギリシャ神話の女神みたいな、白い衣装をまとった美女が現れる。長い長い金色の髪。瑠璃色の瞳は、宝石のようだ。
「初めまして、龍ケ崎寧々」
美女が、柔らかな声で私の名を呼ぶ。
「私はアシエス。あなたが住む世界とは異なる世界、アーシアを創りし女神。あなたにある人を助けていただきたくて、お呼びしました」
「は？」
「彼の名は、クレフ・リード。優秀な魔道士で、アーシアの民をより豊かにする魔道具を、いずれ創り出したであろう人。けれど私がちょっとうたた寝をして加護の薄れた隙に、宮廷魔道士長の座を巡るライバルに毒を盛られ……」

そう言って、彼女はハラハラと涙をこぼす。
「ちょ、待って」
あっけにとられていた私は、慌てた。泣かれるのは困る。どうしていいか分からない。
頼みを引き受ければいいの？　いや、でも、私に解毒知識なんてないし……
「神である私にとっては、十年など瞬きの間。ですが人族である彼にとっては、長い。その間彼はずっと、幽体で彷徨って……」
「って、既にお亡くなりに⁉　それをどう助けろと⁉」
叫んだ私に驚いたのか、自称女神は泣きやんだ。そしてその残滓を指先で拭い、かすかに微笑んで首を横に振る。
「いいえ。今の彼は少々特殊な状態で、死んだとは言えません。ですが体がないのは事実。このまま恨みにのみ込まれれば悪霊となり、真実の死を迎えるでしょう。彼が悪霊になれば国を滅ぼすほどの力があるかもしれません。あなたには、人ならざるものを感知し、見て触れて言葉を交わす【見鬼】スキルと、対価と引き換えにあらゆるスキルと物を作り出す【創造】スキルを授けます」
「対価？」
「何かを作り、売ってください。その金額と同じだけスキルポイントが入ります。もちろん、ポイントを使ってもお金は消えません。現金が消えては、生活に困るでしょう？」
確かに。せっかく収入を得ても、スキルを使えば消えてしまうのでは、よほど稼がない限り貧乏一直線。日々の生活でいっぱいいっぱいになりかねない。

「いや、でも待って。そういうのは、私より雅兄向きだから！」
雅兄は、異世界転生とか転移とかのライトノベルを山ほど読んでいる。私も読んでいるが、雅兄のほうが異世界で必要なスキルをポンポン思いつくだろう。でもって、運動能力も私より上だ。
兄を犠牲に異世界転移を免れようとしているみたいに見えるかもしれないけど、もしも雅兄がこの場にいれば、嬉々として異世界行きを承諾したと思う。昔、行けるものなら行ってみたいとか言ってたし。
「そもそも、もっとファンタジーに通じた人がいそうなのに、どうして私なの？」
「異世界転移に耐性があり、かつ、【創造】と【見鬼】に適性がある人を探して、最初に見つけたのがあなたでした」
耐性に、適性か。心当たりは手作りアクセサリーなんかのイベント販売、およびネット販売からの【創造】スキル適性しかないけどねぇ。
……普通はもう少し、候補を出さない？　即決するほど、該当者がいなかったの？
「ある程度のスキルをすぐに作れるよう、元の世界で作った物の売り上げをポイントに反映しましょう。【創造】で作ったスキルは、あなたの魔力で発動します。使えば使うほどスキルのレベルが上がり、威力と性能も上がります。どうか彼が悪霊となって国を滅ぼす前に、助けてください」
深く頭を下げた彼女の体が虹色の光に包まれる。徐々に消えていく女神の姿に、私は焦った。
「ま、待って！　引き受けるなんて言ってない！　ってか、神様ならあなたが助ければ――」
「それはできません」

私の訴えを遮って答えた女神が、困ったように笑う。
「創造神にできるのは、世界に新たなものを加えることだけ。取り除いたり、なかったことにはできないのです」
「つまり？」
「使者という名の石を水面に投じ、波紋で変化をもたらすしかありません」
「そんな……。って、追加しかできないって、帰りはどうなるの!?　それだけは例外なの!?」
「帰りは、彼にお願いしてください。けれど異世界への侵略などをさせぬために、人の子の魔法で異世界に転移可能なのは、転移先にある物と同じ物を持つ者だけ。あなたの場合は、その髪飾りです。くれぐれも、なくさぬようお気をつけて。それでは、よろしくお願いいたします」
その言葉を最後に、女神の姿は完全に消えた。そして周囲は森へと変わる。
そこは深い深い、樹海のような森だった。

第一章　決意

風が梢を揺らし、濃い緑と土の匂いを運ぶ。見事な森だ。樹齢が何百年もありそうな木々が、そこかしこに生えている。そして民家はさっぱり見えない。

そんな所に、私は一人。持っているのは手芸用品を入れたトートバッグと、財布やスマホ――スマートフォンの入ったリュックサックくらいだ。

「なんて所に放り出すのよ、女神。遭難したら、魔道士を助けるどころじゃないぞ？」

それともここに、その魔道士がいるの？

もう一度見回すが、それらしき姿はない。再び遭難の文字が脳裏に浮かんだ時、女神がくれたスキルの存在を思い出した。

「【創造】スキルを使って、【マップ】スキルを作ればいけるかもしれない」

【マップ】スキルは、雅兄に借りて読んだ異世界冒険小説で、定番のスキルだ。

「自分を中心に、人や魔物、獣の有無を把握して、それが敵かどうかも判断可能。有益な素材のみならず、危険な植物の存在まで指摘してくれて、これまでの旅路や現在地が分かる自動マッピング機能付き。これに既存の地図をデータとして取り込んで、重ねられたら便利かもね。あと……」

小説にあったスキルの機能を思い出し、ついでにあれば便利だと思う機能をつらつらと口にして、

頷く。救助対象を捜すのも大事だが、自分の身を守るのも大事だ。

「うん、【マップ】スキルは必須だね。絶対作らなきゃ」

元の世界で作った物の売り上げがポイント化されているのなら、かなりポイントがあるはずだ。ふっふっふっ、結構稼いでたんだよね。

でも、どうやったら作れるのか。そう続くはずだった言葉は、突然目の前に現れた小さなウィンドウ――スマートフォンのポップアップ通知に似たそれに驚いて、口の中に消えた。

『【マップ】スキルを作成しました』

「は!?」

ウィンドウに書かれた内容を見て、思わず奇声を発してしまう。

「え、なに？　【創造】スキルって、作りたいって思うだけで発動するの？」

意外と迂闊だった女神が作り方を教え忘れたのかと思いきや、こんな簡単操作だったのか。

「……一応、本当にそれでできるのか確認するために、もう一つ何か作ってみようかな」

さて、何を作ろうかと考えた時、スキルの作成報告ウィンドウが消えて、新たに、赤と青の点が表示されたウィンドウが開いた。そして、背後の茂みがガサリと音を立てる。

反射的に振り返ると、一匹のウサギが茂みから飛び出してきた。

可愛い。けれどその額には、一本の鋭い角。

「……異世界のウサギは、角が生えているのが普通なのかな？　それとも魔物？」

魔道士がいる世界なのだ。魔物がいたって不思議じゃない。それが危険生物である可能性も高い。

だから身を守るために、【マップ】スキルにサーチ機能も必要だと思ったのだ。
おそらく先ほど新しく開いたのは、【マップ】スキルのウィンドウ。印はサーチ結果だろう。
どっちだ。動物か、魔物か。敵意は？
「【鑑定】スキルがあれば……」
目の前にあるものが何か、知る力が欲しい。
願った途端、またもや小さなウィンドウが開く。今度は二つ。
『【鑑定】スキルを作成しました』
『魔獣：突進ウサギ（ダッシュラビット）。突進に注意』
やっぱり、スキルは思うだけで作れるらしい。それにしても、魔獣か。
注意書きからして、逃げたほうがいいんだろうと考えた時、ウサギがグッと身をかがめた。嫌な予感がした私は、勘に従って右へ飛ぶ。すると次の瞬間、背後でドンッと音がした。
振り返ると、件（くだん）のウサギが背後の木の幹に角（つの）を突き刺している。もしも逃げ遅れていたら、角は私のおなかに刺さっていたかもしれない。想像して血の気が引いた。
ウサギは木から角（つの）を引き抜こうと、ジタバタしている。奴が動けない今のうちに、逃げよう。
そう思ってウサギに背を向けた私の後頭部に、何かが当たった。ビックリして足を止め、周囲を見たが、原因らしき物は落ちてない。分からないなら、今は逃げるのを優先すべきだろう。
そう判断して走り出したが、いくらもしないうちに、視界の端のウィンドウから消えていた赤が、再び現れた。さっきの例からすると、赤は敵。そしてこれは、たぶんあのウサギだ。

私は逃げるため、必死に走った。デコボコした地面を蹴り、木の根や茂みを飛び越え、全力で。
四足の獣――まして木に角（つの）を突き刺すほどの突進力を持つウサギ相手に、無謀だと思う。けれど止まれない。止まったら死ぬ。殺される。そんなのは嫌だ。
もっと……、もっと速く走る力が欲しい！　アレより速く走る力が！
願えばまたウィンドウが表示されたが、内容を読んでいる余裕はない。けれどそのウィンドウが表示されてから、明らかに走る速度が上がった。
身体強化系のスキルが作られた？　これで逃げ切れる？
いや、まだダメだ。ウサギは必死に逃げる私を甚振（いたぶ）るように、つかず離れず追ってきている。
何か、何か武器はないか。それか、攻撃系のスキル。
その時、前方から近づいてくるものに気がついた。キツネだ。しかも、これまた角（つの）が生えている。
「ヒダリ、トブ」
突然聞こえた声に思わず従うと、キツネが火を吐いた。熱い炎が一直線に、私がいた場所を通り過ぎる。そして――
「ギャン！」
背後で悲鳴が上がった。つい立ち止まって振り返ると、煤（すす）けたウサギが地面に倒れている。そこへキツネが襲いかかり、抵抗するウサギを押さえ込んだ。
「も、もしかして、助けてくれたの？」
角（つの）があって、火を吐くキツネだ。ただのキツネのわけがない。なら、しゃべるかもしれない。

タイミング的に、私に左へ跳べと助言したのは、キツネの可能性が高い。でも、サーチ結果だと思われるウィンドウ上の表示は、ウサギと同じ赤だ。赤は敵。

なら、あれは……幻聴かな。

そう結論づけた私は、再び走り出した。キツネのターゲットが私に移る前に、逃げなければ。

けれどいくらも離れないうちに、「ミギ！」と、再び声が聞こえる。

また反射的に従おうとして、足がもつれて転んだ。その頭上を、炎が通り過ぎる。

間一髪。けれど早く起きないと、次の攻撃が来る。

焦る私の耳に、土を蹴る音が聞こえた気がした。反射的に振り返って、硬直する。

極限の集中のせいか、やけに動きが遅く見える視界の中、キツネが私に向かって跳躍した。

食い殺される恐怖に、頭の中が真っ白になる。その時パシッと激しい音がして、すぐ目の前に迫っていたキツネが撥ね飛ばされた。

私は唖然として、数メートル横に落ちたキツネを見る。見えない何かに撥ねられたキツネは死にはしなかったようで、ふらつきながらも立ち上がり、一目散に逃げていった。

……ってことは、助かった？

いや、そうとは限らない。今度はキツネを攻撃した存在に狙われるかもしれないのだ。呆けてないで、逃げなければ。そう思って足に力を入れた時、横合いから声が聞こえた。

日本語じゃなければ、英語でもない。なんて言ったか分からないけど、呼びかけというよりは、独り言のような声だ。

見ると、男の人が近づいてきていた。おそらくこの人が、キツネを追い払ってくれたのだろう。

彼の背は高く、肩幅が広い。少し癖のある髪は金色で、瞳も金。肌は白く、鼻筋がすっと通っている。西洋系の美形だ。

服は黒のロングジャケットに、同色のベストとズボン。白いシャツの首元にはアスコットタイが結ばれていて、貴族的な雰囲気がある。思わず見とれていると、彼は驚いた様子で足を止めた。

無言で見つめ合うことしばし。彼は恐る恐るといった感じで、口を開く。

声もいい。けれど残念ながら、何を言っているのか分からない。

おい、女神。異世界転移に翻訳スキルは必須だよ？　それすら自分で作れと？

まあ、これまでにスキルが作られた状況を思えば、翻訳スキルも作れるはず。

彼の言葉を理解できるスキルが欲しい。

強く願うと、『【音声翻訳】スキルを作成しました』と書かれたウィンドウが表示された。

……あれ？　ちょっと失敗した？

翻訳スキルに、『音声』なんてのが付いている。でもまあ、使えなくはないだろう。

私は立ち上がり、頭を下げた。

「助けてくれて、ありがとうございます」

「……私が、見えるのか？」

「は？」

変なことを訊く人だと思いつつ、首をかしげて彼を見返すと、またもやウィンドウが開く。

『人族（幽体）』
私は目を瞬かせ、改めて彼をよく見た。言われてみれば、背景がほんのり透けている。
魔法らしきもので、魔獣を攻撃した幽霊。女神が私を送り込んだ森で、最初に出会った人。
「――ひょっとしてあなた、クレフ・リードさん？」
「なぜ、その名を？」
訝しげな彼に、私は笑みを浮かべた。
「私は龍ケ崎寧々。こちらふうに名乗るなら、ネネ・リュウガサキでしょうか。信じられないかもしれませんが、異世界人です。この世界を創ったという女神様に、あなたを助けてと頼まれました」
日本だと中二病と思われそうな内容を、思い切って告げる。すると彼は再び目を見開き、「アシエス様が？」とつぶやいた。
「はい。今さらですが、十年前に毒を盛られたクレフ・リードさんですよね？」
同姓同名の魔道士の幽体が、偶然ここにいたってことはないと思いたい。そんな私の思いが伝わったのか、彼がかすかに笑みを浮かべる。
「ああ、そうだ。あれから十年もの時がたっていたとは知らなかったが、リューガーサキが……すまない、発音が難しいな」
「なら、ネネでいいですよ」
「助かる。代わりと言ってはなんだが、私もクレフでいい」

「いいんですか？　貴族とかじゃ……」
宮廷魔道士長候補だった人だ。そんな地位に昇ろうかという人が、平民とは思えない。
すると案の定、クレフは頷いた。
「確かに私は伯爵家の跡継ぎだったが、今はこのような身の上だからな。気にする必要はない。言葉も、楽にしてくれてかまわんよ」
彼は自身の胸元に手を当て、自嘲気味にクスリと笑う。
なんと返すべきか分からないが、砕けた言葉でいいのはありがたい。敬語に変換するためにワンクッション挟まなくていいのは楽だ。どちらにしても、なんちゃって敬語だけど――
「じゃあ、遠慮なく」
お言葉に甘えると、彼はもう一度頷く。そして立ち話も何だからと、私の手を引いた。
彼に案内されたのは、近くの倒木だ。「こんな所ですまないが」と言われたが、私は気にせず、乾ききったそれに座る。すると彼も私から少し離れて、隣に座った。
「それで、ネネは創造の女神アシエス様に呼ばれて、私を助けに来たと言っていたが……」
「そう。信じてくれる？」
「ああ。この世界には、時折アシエス様に招かれた異世界人――渡り人と呼ばれる者たちが現れる。そして女神に授けられた膨大な魔力や特殊な力で、人々を助けてくれるのだ」
「そうなんだ。女神様が言うには、今のクレフは少し特殊な状態で、死んだとは言えないらしいよ。でもこのまま恨みにのみ込まれれば、悪霊となって真実の死を迎えるって……」

「そうか。ではやはり、私はまだ死んではいないのだな」
クレフはかすかな笑みを浮かべて、ほっとしたようにつぶやく。
「やはりって、クレフは知ってたの？　特殊な状態って、どういうこと？」
私の問いに、彼は「確信があったわけではないが」と言って、十年前のことを教えてくれた。
――十年前、エイムズ王国と呼ばれるこの地の貴族であり宮廷魔道士だったクレフは、魔法の研究にのめり込むあまり、数日徹夜することが少なくなかった。だから効率よく回復するため、睡眠時に薬草を練り込んだ香を使っていたらしい。それに毒が混ぜられていた。
気がついた時には解毒の魔法薬を取りに動くこともできず、やむなく、研究中で手元にあった魔法符を発動させ、肉体の時間を停止した。
魔法符とは、誰でも簡単に魔法が使えるよう、魔力を込めたインクで特別な紙に魔法文字を書き、魔法を付与した札（ふだ）だ。魔法符が破られるか、込めた魔力が尽きれば魔法は解ける。
クレフは魔法が解ける前に犯人以外の者に発見され、解毒が間に合うことに賭けたのだ。けれどここで、予想外の事態が二つ発生した。
一つは幽体離脱。時間停止魔法が発動した途端、クレフの魂（たましい）は体からはじき出されて戻れなくなった。そして魔力を蓄積する体を失った影響か、魔法が使えなくなったのである。今の彼が多少なりとも魔法を使えるのは、訓練したからだそうな。
もう一つは、時間停止魔法の解除不能。クレフの同僚が魔法符を破ろうとしても破れず、有限であるはずの魔法符の魔力がいつまでも尽きなかったため、魔法が解けなかったとか。
毒物は事件の第一発見者――暗殺の証拠隠滅に、朝一でクレフの研究室に来た犯人に処分され、未発覚。結果として、事件は魔法を暴走させての事故として処理されたらしい。
「犯人は次期宮廷魔道士長候補のライバルで、クレフに暗殺を仕掛けるくらいだから、仲はよくなかったんでしょ？　そんな人が第一発見者って、誰も怪しまなかったの？」
「研究室が隣なのだ。隣室に異常を感じたと言われては、仕方ない。それに、さすが公爵家子息、処世術に長（た）けていて、証拠隠滅に来た彼が悪態をつくまで、私自身、そこまで憎まれているとは知らなかった。おそらく、誰も気づいてはいないだろう」
うわぁ、貴族って、怖い。
「魂（たましい）が体からはじき出された原因は分からないが、魔法が発動したタイミングからして、死んではいないはず。魔法さえ解ければ、体は取り戻せる。そう信じていたが……」
クレフは膝の上の手を握りしめた。きっとこの十年間、ずっと不安だったのだろう。よく、犯人への憎悪で悪霊にならなかったものだ。もしそうなっていれば、彼は死んでいた。理屈は分からないが、女神が言っていたのだから間違いない。
キュッと胸が痛んだ私は、思わず彼の手に自分の手を重ねた。
「大丈夫。すぐに魔法を解くよ。体を取り戻して、犯人を告発してやろう。ね？」
にっこり笑うと、彼はかすかな笑みを返してくれる。
「ありがとう、ネネ。だが渡り人とはいえ、子供のおまえを危険にさらすのは……」

その言葉に、私は思わず笑顔のまま表情が固まった。
「……私、二十二歳だけど？」
「二十二!?」
驚いて目を見張るクレフに対し、改めて微笑(ほほえ)みながら、「で？」と訊(き)く。
「この世界の成人って、いくつなの？」
「……十六だ」
気まずいのか、クレフは微妙に視線をそらしつつ答える。
なるほど、なるほど。つまり私は十六歳以下に見えたと。
日本人は、実年齢より若く見えると聞く。チビで童顔な私は、なおさらだろう。そこに人種どころか、異世界という壁。分からないのも仕方ない。実際、私もクレフの年齢は分からないし。
でもだからって、十六歳以下って……
「ちなみに、クレフはいくつ？」
「あれから十年ならば、三十五と答えるべきか」
「つまり、見た目は二十五なのね」
魔道士長候補だし、若くても二十代後半かと思いきや、意外である。
「まあそれはともかくとして、危険ってどういうこと？」
年齢の件はお互いさまと思って水に流すことにし、気になったことを訊(き)く。すると私に視線を戻した彼は、顔をしかめた。

「……私の体がある場所が、問題なのだ」
「お家じゃないの？」
「違う。両親は、いずれ何かの拍子に魔法が解けるかもしれないと考え、私を屋敷に引き取った。しかし、奴も同じことを考えたのだろうな。ほどなく屋敷に忍び込み、刺殺しようとした。だが時間が止まった体は刃を通さなかったため、この森の地下にある迷宮へ捨てたのだ。迷宮は生き物以外を取り込んで、最下層にある迷宮核の間に送る。つまり私の体があるのは、迷宮の最下層だ」
「……ひょっとして迷宮には魔物がいて、それを生み出しているのが迷宮核だったりする？」
「ああ。地下で澱(よど)んだ魔素(ませ)――大気に含まれる力が凝縮して物質化したのが、迷宮核だ。それが迷宮と呼ばれる亜空間と魔物を発生させる」
「でもって核が壊されると迷宮が消えるから、核を守る存在が迷宮核の間にいたりして？」
「ああ。迷宮核には、守護者と呼ばれる魔物がついている。その迷宮で、一番強い魔物だ。しかし、よく知っているな。ネネの世界にも迷宮があるのか？」
「いや、ないよ。魔法もない。想像で書かれた物語があるだけ」
先の二つは、ダンジョンものライトノベルでよくある設定なのだ。
「そうか。まあ、魔物を倒すことで得られる魔宝石は、今や魔道具の動力源だ。そのため、百数十年前に魔道具が開発されて以来、どこの迷宮核も破壊されていない。だがここの迷宮は、少々事情が異なる」
「事情？」

「不定期に構造が変化するため、発生してから三百年たつ今も、未だに最下層が発見されていないのだ。つまりここならば、迷宮核の間に送られた私の体を、誰かが見つける可能性は低い。加えて、仮に魔法が解けても、自力での脱出は難しいだろう。解毒薬もなく、死に至る」
「なっ……」
なんてひどい。
「本当に、よく悪霊化しなかったね」
そう言うと、彼は苦笑した。
「……認めたくなかったから、だな」
「え？」
「ネネの世界では違うのかもしれないが、この世界では、死後も地上に残る霊は人に害をなす悪霊といわれている。手を出せば悪霊――死者だと認める気がした」
そうか。死んだと思いたくなくて、十年も耐えたのか。すごいな。その精神力のおかげで、女神の救済が間に合った。でも……
「ネネ。迷宮にはさまざまな魔物がいる。浅い階層であれば先ほどネネを襲った炎のキツネ（フレアフォックス）――キツネの魔獣より弱いくらいだ。けれど、深い階層の魔物は強い。魔獣から逃げていたネネは、戦いの経験などないのだろう？　危険だ」
クレフは私が重ねたままだった手を引き抜き、私の手の上に置く。そして笑った。
「私がまだ生きていると、教えてくれて感謝する。私は、自分の力で体を取り戻そう。最寄りの町

まで送るから、そこの貴族に渡り人だと明かし、帰還を願って王都へ連れて行ってもらうといい」
「でも、女神様はクレフに頼めって……。それに、役目を果たさないと帰れないかもしれない」
「異世界への転移魔法に適性のある者は少ないが、私以外にも可能な者はいる。そして、かつてこちらの暮らしが合わず、何かをなすことなく病（やまい）に倒れた渡り人を、帰した記録がある。私を助けずとも、帰還できないことはない」
「……そう、なんだ」
確かに私は、戦闘経験なんてない。いざという時の護身術は鉄兄から教えられたが、あくまで対人。それも、逃げるためのものである。
でも、それでいいの？　女神の言葉を伝えて、それで終わり？　魔獣から命を助けてもらったのに、自分は何もできないの？
悔しく思いながら、クレフに握られた手を見た。すると、凝視が【鑑定】スキル発動のトリガーだったのか、ウィンドウが開く。
『異世界人：ネネ・リュウガサキ』
私の情報だ。突進ウサギ（ダッシュラビット）やクレフの時と違って、名前以外にも色々表示されている。
〈能力値〉体力：２２０　持久力：１９０　スピード：１９０　筋力：１５０　器用さ：３００
魔力保有量：５１３０
〈称号〉渡り人

〈職種適性（最大値：10）〉嫁：6　狙撃手：9　魔道士：1　魔闘士：3　魔道技師：4
〈ギフトスキル〉【見鬼（けんき）】レベル99　【創造】レベル99
〈スキル〉【マップ】レベル1　【鑑定】レベル1　【身体強化】レベル3　【音声翻訳】レベル1

改めてクレフを見ても、先ほどの情報に名前が増えたくらいで、能力値などの項目はない。
もしかして私より強い相手に、【鑑定】は効かないのかな？　レジストとかいうアレで。
まあ、だから私の数値がすごいのかどうかは分からないが、職種適性が変なのは分かる。
嫁って、職業か？　それに、一番適性のあるのが狙撃手って……
私に狙撃経験なんてない。触ったことのある銃は、割り箸（わりばし）と輪ゴムで作ったゴム鉄砲か、夜店の射的、ゲームセンターのシューティングゲーム程度だ。
ゴム鉄砲で倒した的の数は兄妹間で一番多いし、射的では狙った獲物（おかし）を外したことがない。シューティングゲームは、最高記録を塗り替えたことがあるけれど……それが、適性9の要因？
ともあれ、魔道技師は生産職っぽいし、戦闘職らしき魔道士と魔闘士の適性は低い。迷宮で戦ってクレフの体を取り戻すなら、役に立つのは狙撃手くらいだろう。それを目指すしかない。
スキルの詳細もざっと確認した私は、【創造】スキルの設定ウィンドウを出せることを知り、早速チェックした。そしてスキルの発動を自動から手動・音声操作に変更して、一息つく。
【創造】スキルの初期ポイントとして女神に与えられたポイントはまだあるけれど、欲しいと思っただけでスキルが作られていては、あっという間にポイントを使い切ってしまいかねない。緊急時

はいいかもしれないけど、やっぱりね。切り替えスイッチがあったのは、幸いだった。
一度作ったスキルの作り直しはできないみたいだし、条件付けで必要ポイントが変化するらしいから、今後はよく考えて作らないとね。
「ネネ？」
急に黙り込んだせいか、クレフが訝（いぶか）しげに私を呼ぶ。ハッとした私は、まっすぐに彼を見上げた。
うん。やっぱり命の恩人に対して何もしないのは、嫌だな。性に合わない。
「王都には、クレフを暗殺しようとした魔道士がいるんだよね。それも事件から十年たって、宮廷魔道士長として君臨しているかもしれない魔道士が」
「ああ、そう言われれば、そうだな」
「渡り人は、女神様に授けられた膨大な魔力や特殊な力を持つんでしょ？　帰さないで、利用しようと思うんじゃないかな」
私が犯人の所業を知っていても、被害者本人の証言や証拠がない限り、断罪できない。はたからは、言いがかりにしか聞こえないのだ。そして、もしもそいつが私に人助けを求めたら……
そいつに対する周囲の好感度アップに役立つのは嫌でも、断れる気がしない。
これにはクレフも同意見みたいで、フムと頷（うなず）く。
「ないとは言えんな。昔から、渡り人の恩恵を得るために、高い身分や役職を与えて引き留めようとする者はいる。中には渡り人にバレなければ問題ないと、元の世界へ帰るために必要な物――あちらの世界にある物と同じ物が必要なのだが、それを盗む輩（やから）もいた」

「うわ、ひどい」
「そうだな。そして渡り人は、王族の伴侶に望まれることもある。もちろん、当人も望んで婚姻を結んだ者もいるだろうが……」
「帰還に必要な物を失って、仕方なくって人もいたかもしれないね」
「ああ。魔道士長の座に固執した奴が、今度は爵位のために、ネネを王族に献上する可能性は否定できない。奴は次男で、公爵位を継げんしな」
冗談じゃない。献上品にされてたまるか！　私は帰る！
「ならやっぱり、王都行きはナシで。それにクレフは自力で体を取り戻すって言ったけど、何かあてがあるの？　私なら、確実に魔法を解除できるよ。女神様にもらった【創造】スキルで、【魔法無効化】スキルを作るの。【状態異常無効化】スキルを作れば、即座に解毒も可能だよ」
「【創造】？」
「うん。私が作って売った物に応じて発生するポイントと引き換えに、あらゆるスキルと物を作り出すスキル」
「あらゆる……。ではその力で、異世界転移のスキルを作ることも可能なのではないか？　それなら、王都に行く必要はない」
「た、確かに！　でもそれ、さすがに作れないようにされてるんじゃ……」
女神は使命を果たしてほしいはずだ。
そう思いつつも、念のために調べた結果は――

「……できるみたい。必要ポイントが百万で、現状だとまったく、ぜんっぜん足りないけど」
ってか、ヒット商品でも作らない限り、百万なんてなかなか貯まらないだろう。
なら、クレフの体があるはずの迷宮核の間へ転移するスキルは？　と思って調べてみると、行ったことのない場所への転移は不可能と出た。その場の状況を知らなければ、危険だからしい。
じゃあ、千里眼で見通してと考えたものの、これまた途方もないポイントだった。
私はうなり、そして上目遣いにクレフを見る。
「スキルだと、かなりの日数がかかると思う。でも私は、できれば二ヶ月以内に帰りたい」
「二ヶ月？　何かあるのか？」
「うん。友達と遊ぶ約束をしてるんだよ。その数日後には、大学の授業も始まる」
友達には誠心誠意謝れば許してもらえるだろうし、大学は卒業制作のドレスと出席日数だけ。最悪、一週間程度は欠席しても大丈夫だと思う。今まで真面目にやってきたから、ドレスさえしっかり作れば、ゼミの教授も少しくらい大目に見てくれると思うんだよね。……たぶん。
幸い今日の買い物で、ドレスのレースを編む材料も買い、持っている。迷宮攻略の合間に時間があれば、それを編もう。でもって元の世界に帰ったら、とにかく頑張る。卒業できなかったら、せっかく内定をもらった手芸クラフト店で働けない！
「だからお試ししない？　確かに私は戦いに慣れてない。でも転んで逃げ遅れるまでは、魔獣に怯(おび)えて動けないなんてことはなかった。備(そな)えてから挑めば、魔物とも戦えると思う」
「しかし……。ならば、魔道具の作り方を教えよう。物によるが、そこそこの値で売れるぞ」

「や、さすがにそんな手伝いをしてもらっておきながら、何もせずに帰るなんて恩知らずなことはできないよ。むしろそれで得たポイントは、クレフを助けるのに使わなきゃ。命の恩人に加えて、帰還の手伝いまでしてくれるって人を放置して帰るなんて、人としてどうかと思う」
「だが……」
「それに、女神様のクレフへの目のかけっぷりからして、助けずに帰るのは許してもらえない気がする。女神様にできるのはこの世界に加えることだけで、他の形での介入は一切できないって言ってたから帰還阻止はできないとしても、帰還後即座に再召喚されたら、意味がないでしょ？　使命を果たしたほうが、確実に帰れるんじゃないかな」
　私の主張に、クレフはとうとう沈黙した。そして――
「……無茶はしないと約束してくれるか？　私のせいでネネが傷つくようなことになれば、悔やんでも悔やみきれない」
　しばらくしてそう言ったクレフに、私はもちろん頷いた。
「せっかくだから戦う手段として、魔法の使い方とかも教えてくれる？」
　魔法が使えるなら使ってみたいとウキウキする私に、クレフは苦笑しながらも了承してくれた。
　その時、私の背後で何かがピシッと割れる音がする。直後に、「ピィ」と、可愛らしい鳴き声が聞こえた。
「フードの中だ」
　クレフに言われた私は慌ててパーカーを脱ぎ、フードの中を確かめる。

　そこには、白い卵があった。ほんのり光っているそれは、結構大きい。Ｌサイズの鶏卵以上の大きさがある。
「なんでこんな所に卵が……。ああ、あれか。ウサギから逃げる時、上から落ちてきた」
　よく頭で割れず、しかも、フードの中に入ったものである。
　感心していると、卵にさらなるヒビが入った。そしてあっという間に広がって、パカンと割れる。
「ピィ！」
　全身フワフワの産毛に包まれた雛が、元気に鳴いた。そして、つぶらな黒い瞳で私を見上げる。
　ほんのり光る体は、冬のシマエナガのように白く、小さくて丸い。頭には、オカメインコみたいにクルンとカールした冠羽があった。はっきり言って、めちゃくちゃ可愛い。
「ママ！」
「……しゃべった」
　しかも、魔獣から逃げていた時に聞いた声と同じだ。
　この世界には魔物がいて、魔法も使える。なら、しゃべる鳥が生まれる前からしゃべっても、おかしくないよね。そしてそれだけ知能のある鳥なら、刷り込みの訂正が可能かもしれない。
「違うよ、雛ちゃん。私は寧々。人間だから、雛ちゃんのお母さんじゃないよ」
「ネーネ？」
「そう！　で、こっちはクレフ。幽体だけど、見えるかな？」
　彼の前に差し出すと、雛は「パパ！」と叫んだ。言われたクレフは目を見張り、苦笑する。

「私が見えたことにも驚いたが、まさか聖魔鳥にお気に入りの認定をされるとはな」
「聖魔鳥？　お気に入り？」
「その鳥だ。ほのかに光る白い卵に、同じく光る白い体毛。間違いない」
クレフ曰く、聖魔鳥は守護魔法を得意とする聖なる鳥。しかし憎悪などの負の感情で羽が黒く染まった場合は、すべてを破壊する魔鳥となるそうな。
聖魔鳥の卵は気に入った人の前に突然現れて、孵化する。選ばれた人は、聖魔鳥が命を共にするお気に入り。その人の魔力を糧として、その人が生き続ける限り、聖魔鳥も生きる。ただし魔鳥となった場合は、その限りではない。
お気に入りに選ばれるのは男女各一名で、一度に選ばれることもあれば、一人ずつの時もある。パパ、ママと呼ばれた相手がそうらしい。ちなみにこの呼び名は、希望すれば変えられるという。
私はさっき、ネーネと呼び直してもらったので、それでよしとした。クレフはクーと変更する。
私に出会うまでのこの十年、クレフの姿を見ることができる人はいなかったらしい。なので聖魔鳥が呼びかける先にクレフの姿を見る人はなく、悪霊がいると騒ぎになりかねないとのこと。
クーなら、鳴き声としてごまかせるのではないかと彼が真顔で言った時は、思わず笑った。
困ったのは、聖魔鳥の名前。雛ちゃんと呼びかけたのを、名付けとして受け取られていた。しかも私たちへの呼び名と違って、変更を受け付けてくれない。まあ、安直だけど可愛いし、いいか。
気を取り直した私は、ヒナちゃんに写真撮影をお願いした。
「家族に事情を説明しておきたいの」

私は家族とグループ登録しているメッセージアプリで、毎日、おはようとか行ってきますとか、メッセージを送っている。独り暮らしのため、生存確認的な感じだ。
その送信がないと、行方不明がバレる。そうなったら捜索願なんかが出されて、無事に帰還できても色々めんどくさい。それに、心配させるのは不本意だ。
「でも心に直接話しかけるスキルだと、幻聴と思われかねないんだよ。だから物的証拠を残したい。あっちの世界に光る鳥はいないから、その写真で異世界転移を信じてもらえるかもってわけ」
スマホを見せて写真がどんな物か説明し、許可を取った私はヒナちゃんを手に乗せて、森を背景に写真を撮った。続いて【創造】スキルのウィンドウを出して操作し、家族への連絡手段作成に取りかかる。
材料や代償があると消費ポイントの削減が可能だったため、通信時にスマホの電力を犠牲にすることにし、【メッセージ】スキルの作成を実行した。
『現在地、異世界。友達と約束したイベントまでには帰れるように、頑張る。捜索願は出さないで。あと、冷蔵庫の中の生もの、処理よろしく』
早速文章を入力し、写真と共に送信する。バッテリー残量が一気に半分近く減ったものの、無事に送れたようでほっとした。その直後、ピロンと音がして、返事が来る。雅兄だ。
ＣＧ加工もこなす兄には、写真があっても信じがたいらしく、『マジで？』と書いてある。
『マジです。通信手段は電力が代償。連絡はこれが最後と思って。でも、絶対に帰るから』
『……あほう。当たり前だ。ちゃんと帰ってこい』

その着信を最後に、画面がブラックアウトした。バッテリー切れだ。
「ん。ちゃんと帰るから」
スマホをぎゅっと握った私は、元の世界とのつながりが切れた不安を振り切って、スマホをリュックサックに突っ込んだ。

第二章　迷宮都市カグラ

聖魔鳥は生まれたてでも、種族固有の守護魔法である結界や、障壁を展開できるらしい。ただし、大きなものや長時間は不可能とのこと。

私は衝撃を吸収する結界で自身を守ったヒナちゃんを、マントのフードに入れて森を走っていた。

目的地は、ここから最も近く、かつ、クレフの体が捨てられた地下迷宮への出入り口がある町。

迷宮の魔物と戦うハンターとなって、私をこの世界に送り込んだ女神が願った通りクレフの体を取り戻し、後顧の憂いなく元の世界に帰るためである。

帰還目標は二ヶ月以内。早ければ早いほどありがたい。

トラブルは避けたいので、私が渡り人だということと、クレフの存在は秘匿することにした。

なぜなら渡り人は、創造の女神がこの世界の人を助けるために、異世界から招いて力を与えた存在だと知られている。渡り人だとバレたら、何かと頼られかねない。元の世界に帰れる日が、著しく遠のいてしまうだろう。

一方クレフは、バレたら存在消滅の危機だ。何せこの世界では、地上に残る霊は人に害をなす悪霊だと思われていて、討伐対象なのである。特に創造の女神を祀る神聖教会は、悪霊祓いを職務の一つとしているので、注意しなければいけない。

それにしても、突進ウサギに追われて作った【身体強化】スキルは、意識して使うとすごい性能だ。一蹴りで巨大な倒木に飛び乗れるし、下りる時にもあまり衝撃を感じない。そこそこ広い川や崖も、軽々と飛び越えられた。

そのたびに翻るマントが、私をゲームのキャラクターになった気分にさせる。

フルダイブの感覚共有ゲームなんかができたら、こんな感じかな？　正直、楽しい。

ちなみにこのマントは、【創造】スキルで作った。魔獣狩りや素材採集で森に来たハンターに出くわした際、日本の服を見られないようにである。

クレフによると、私のシャツやパーカー、ジーンズはデザイン的には問題ないけれど、庶民にしては質が良すぎるらしい。訳あり貴族のふりをしてもいいが、設定を考えるのがめんどくさい。かといって、全部【創造】で作るのはポイントがもったいないので、マントで隠すことにしたのだ。

町に着いたら、服を買って着替えるつもりである。その際の軍資金は、ヒナちゃんが孵った卵。割れたあともほんのり光っている聖魔鳥の卵の殻は、多少魔除けの効果もあって、需要が高いらしい。その上そう簡単には手に入らないため、高値で取り引きされているとか。

ヒナちゃんはフードの中で孵ったので、ひとかけらも漏らさず回収できている。これ以上砕けないよう亜空間保存の【アイテムボックス】に入れたから、保存状態もバッチリだ。

そう、【アイテムボックス】。温かい食べ物は温かいまま保存して、大きな荷物を抱えることなく旅ができる便利スキル。私はこれを、移動開始前に作った。だってそのほうが移動しやすいし、大事な物をなくさないですむもの。

女神によると、元の世界に帰るには、あちらにある物と同じ物が必要だ。私の場合、それが自分で作ったシュシュらしい。

確かに、自宅にもう一つある。だから絶対になくすわけにはいかないのだ。

私は道案内するクレフを追いかけながら、【マップ】の表示に気を配りつつ、ゴムのみで結ったポニーテールを揺らして森を走った。しばらくして、突然クレフが立ち止まる。

「ネネ、ここに麻痺解除の薬草がある。このまま売ってもいいし、調薬してから売れば、【創造】スキルのポイントになるだろう。摘んでいこう」

クレフが指し示した先には、小さな白い花が咲いていた。葉っぱは黄色。群生地を根絶やしにしない程度に摘んで、【アイテムボックス】へ入れる。

移動しては摘み、また移動して――

途中、薬草をつまみ食いしたヒナちゃんが、あまりの苦さにパニックを起こしたのが、かわいそうながらも可愛かった。しばらく「ピィィ」と情けない声を出していたけれど、クレフが口直しに甘い果実を探してくれて、ようやく落ち着いたんだよね。

この世界へ来て早々に、突進ウサギや炎のキツネに立て続けに襲われたのに、クレフに出会って以降は、そんなのどかな時間が続いていた。

ところが、何度目かの薬草採取中、クレフが叫んだ。

「ネネっ、上だ！」

警告に反応して、私はとっさに後ろへ飛ぶ。直後、目の前に大蛇が落ちてきた。大蛇は太くて長い体をうねらせ、角の生えた頭をもたげる。そして素早く私に飛びかかった。

「ピィー!!」

大蛇の牙が私に届く寸前、ヒナちゃんが鋭く鳴く。そのひと鳴きで、私の前に光る盾が現れた。大蛇は空中でそれにぶつかり、地面に撥ね返される。そこへ、クレフが三日月型の光を放った。

一抱えはある太いヘビの体に、三分の一ほど切り込みが入る。続けて放たれた二つの三日月が、残りを切り落とした。

「かつては一撃で落とせたのだがな」

クレフはそう言って、ため息をつく。

直径二十センチはありそうなヘビを、一撃で？　とんでもないな。

ドキドキと激しく脈打つ心臓を抑えるように、私は胸元に右手を置く。その手がかすかに震えていた。

澱んだ魔素の影響で変異した生き物が、魔獣になるらしい。ちなみに魔獣には必ず角があり、強ければ強いほど、その角は立派なものだとか。

この森には魔獣がたくさんいると聞いていたけど、さすがにあんな大蛇が出てくると、怖い。

私は震える手を握りしめ、意図して大きく呼吸する。

落ち着こう。まずはお礼を言って、それから……

「クレフ、ヒナちゃん、助けてくれてありがとう。にしてもこのヘビ、なんで【マップ】に表示されなかったんだろう。まさか上は、サーチ範囲外とか？」

「ソーナノ？」
フードの中から出てきたヒナちゃんが、肩口で首をかしげる。
「いや、静寂の蛇だからかもしれんぞ。これは探査魔法でも感知が難しく、ヘビ故に、巨体であっても忍び寄るのを得意としている」
「厄介なのがいるんだね。でも難しいってだけで、絶対に見抜けないわけじゃないんだね？」
「ああ。今の私では不可能だがな」
なら【マップ】スキルのレベルが上がれば、探知可能かもしれない。レベルアップに期待しよう。
「さて、この魔獣は魔石である角の他に、肉と皮にも需要がある。【アイテムボックス】に入れられるか？」
「え……、本体も入れるの？」
私は思わずクレフを見返した。
休憩の時に教えてもらったので、魔石に需要があるのは知っている。魔石は、魔宝石ほどの力が必要ない生活魔道具に使われているらしい。二つの違いは出力の差。例えるなら電動自転車と、自動車みたいな感じかな。馬力が違うという。
そんなわけで、魔石も売れる。せっかく魔獣を倒したなら、採取すべき素材だ。でもヘビそのものは……正直遠慮したい。遠慮したいが、入れなきゃいけないのか。
そんな思いを込めた私の問いに対して、クレフが無言で頷いた。
……よし。ヘビだと思うからいけないんだ。これは肉。

「クレフ。鮮度で【アイテムボックス】がバレちゃいけないし、氷づけにしてもらえる？」
この世界には一般的に、アイテムバッグというのが流通している。見た目以上に物が入るのは【アイテムボックス】と同じだが、時間停止機能がなく、鮮度は保持してくれないそうだ。
渡り人の遺産としてなら、時間停止機能のあるアイテムバッグがあるらしいが、渡り人だとバレたくないのはもちろん、その末裔と勘違いされても困るので、偽装は大切である。
そんな私の主張により、クレフはヘビを凍結してくれた。ただし一度に使える魔力が少ないため、ぶつ切りにして。私はそれを、【アイテムボックス】に入れる。何の肉か意識してはいけない。
ちなみにこれらを人前で虚空から出すわけにはいかないため、とりあえずトークバッグでごまかして、迷宮に潜る前には、ウエストポーチ型のアイテムバッグを買うつもりである。
その後も私たちは薬草を摘み、キノコや果物、花なども採取しつつ、休憩を挟んで森を走った。
ヘビ以降に出たのは、青いクリスタル状の角を持つ突進ウサギ。
白い角は普通の魔石だが、色付きで透明度が増した角は魔晶石と呼ばれていて、より強い魔獣から採取できる。これも魔道具の動力源だ。出力は、魔石と魔宝石の間。スクーターってところかな。
この突進ウサギも、クレフが狩る。そしてまた移動し、もうそろそろ次の休憩を入れようかと思った頃、彼が言った。
「渡り人の【身体強化】スキルはすごいな。もうすぐ森を抜けるぞ」
「え、本当に？」
「幸い、手に負えない魔獣との遭遇がなかった上に、地形による迂回もほとんどしなかったしな」

子供の頃、外で遊ぶのが大好きな長兄に連れられて、アスレチックで遊んだからねぇ。人生、何が役に立つか分からないものだ。
「なら、出口までは休憩なしで行こう」
街道で休んでいれば、乗せてくれる馬車に出会うかもしれない。まあ、来るかどうか分からない馬車を待ち続けるわけにはいかないので、しばらくしたらまた走るけどね。
勢いを増して走ること数分。進行方向の木々がまばらになり、視界がひらけ始めた。どうやら最後は崖らしいが、高さの確認のため先行したクレフの制止はない。なら問題なしってことで、ジャンプ。そして着地。
さて、と立ち上がった私の背後で、どよめきが起きた。
ギョッとして振り向くと、【マップ】スキルのサーチ範囲外――およそ十メートルほど向こうに、馬車を囲む集団がいる。こぎれいな格好の人たちだから、野盗なんかじゃないだろう。でも気は抜かない。まれに、非合法な奴隷商がいるらしいしね。
それにしても、止まれの指示、見逃したかな？
そう思った時、クレフが「すまん」と言った。
「しかし上からは、木の陰で分かりにくかったのだ。気づいて制止しようとした時には、ネネは既に飛んでいた」
……ごめん。出口だと思って、スピードを上げすぎたかもしれない。
「こんな崖を飛び下りてくるなんて、お嬢ちゃん、身体強化魔法の使い手かい？」

笑みを浮かべたおじさんが、訊いてくる。
「ええ、まあ」
魔法じゃなくて、スキルだけど。
「一人かい？　女の子一人で旅とは不用心だと思うが、よっぽど腕に覚えがあるのか？」
そう言いつつ、おじさんは何かを探るみたいに崖の上を見た。
ん？　もしかして、私が野盗の手先じゃないかと疑われてる？
そう思った時、ヒナちゃんが「ツイタ？」と訊きながら、肩口に上ってきた。
「白い鳥……。まさか聖魔鳥の幼体か⁉」
驚いたように言ったおじさんが、警戒も忘れて走り寄ってくる。
「え、ちょ、あげませんよ⁉」
思わずヒナちゃんを手の中に包んでかばう私に、慌てて立ち止まったおじさんが苦笑した。
「いや、失礼。聖魔鳥はめったに見れん存在だし、興奮しちまって」
おじさんは最初に見せたのとは違う、にこやかな笑みを浮かべる。
「白い聖魔鳥は、善人をお気に入りに選ぶと言われているから、信用できる。賊の手先と疑って悪かった。俺はドレイク商会のパルス・エイリー。この行商隊の責任者だ」
おじさんが出した木札を見て、クレフが頷く。
「本物の行商鑑札だ。ドレイク商会は王都の大店で、城にも出入りしている。信用していいぞ」
その言葉に安心して、私は肩の力を抜いた。そして名乗り返す。

「ネネ・リューガーです」
おじさんに信用してもらったのに悪いけれど、偽名である。
渡り人の名前は、この世界の人にとって発音しにくいことが多いらしいからね。もしかして……と、疑われる可能性すらつぶしておきたい。かといってまったく違う名前だと、呼ばれても反応できないかもしれないため、クレフが発音できる部分で切ってみた。
まあ、私がなろうとしているハンターは、ファーストネームで呼び合うのが一般的だそうだけど。
仕事の評価を家格で左右させないようにだと言われているが、お忍びの貴族や、訳ありがいるからでもあるそうな。ハンターギルドは魔物や魔獣を狩るため、どんな人でも受け入れている。
「実は、馬車の車輪がぬかるみにはまった拍子に歪(ゆが)んじまってな。直すのに手間取っているんだ。よければ力を貸してくれないか？　礼はするよ」
「いいですよ。代わりに目的地が迷宮都市のカグラなら、馬車に乗せてほしいんですが……」
「お安いご用だ」
交渉成立である。

修理の終わった馬車が、ガタゴト音を立てて進んでいた。馬車は全部で三台あり、雇われの護衛四人が、その前後左右を守っている。
この護衛たちは身体強化魔法が使えたが、立ち往生していた馬車は下手に押せば脱輪しそうな状態で、かといってぬかるみの中で持ち上げて修理するには、力が足りなかったらしい。でも私が加

わったことで、あっさり持ち上がった。あともうちょいだったんだね。
乗せてもらった馬車は集団の先頭で、パルスさんの他には御者(ぎょしゃ)を務める従業員が一人いた。
この状況では何か疑問があったとしても、クレフに話しかけられない。他の人には見えないし、悪霊がいるなんて騒ぎになったら、困る。そこで私は、スキルを作ることにした。
『おーい、クレフ。聞こえる？』
早速試しに呼びかけてみると、クレフがギョッとした顔で私を見る。
『人前で話すわけにはいかないでしょ？　だから、心の中で話す【念話(ねんわ)】ってスキルを作ってみたの。ヒナちゃんも交えて、同時通信も可能だよ』
「私からもか？」
『うん。レベル1だと半径一メートル以内の仲間とだけだから、今のところこういう状況でもなきゃ、意味ないけどね。距離が延びれば役に立つと思うよ』
現在の仕様を伝えると、クレフがなるほどと頷(うなず)く。
『次はヒナちゃんに話しかけてみようと思うんだけど、その前にクレフから、ヒナちゃんに説明してもらってもいい？　驚いて声を出したら、パルスさんたちが奇妙に思うでしょ？』
「ああ、そうだな。ヒナ――」
会話の片方だけを聞いて不思議そうにしていたヒナちゃんは、説明を聞き、期待のこもった目で私を見上げた。私はそんなヒナちゃんと、【念話】で内緒話を始める。ヒナちゃんはピルピルとさえずって、楽しげにお話ししてくれた。そうとは知らないパルスさんが、私に話しかけてくる。

「ところで、ネネ。もし聖魔鳥の卵の殻を持っているなら、ぜひ買い取りたいんだが……」
「殻、ですか？」
慌てて内緒話をやめた私は、チラリとクレフを見た。すると、彼が頷く。
「殻はギルドで売る予定だったが、この商会ならば、買いたたくことはないだろう。殻が丸ごとあるのはまれだし、ついでにぶつ切りにしたヘビも、多少色をつけて買い取ってくれるやもしれん」
クレフ、意外と抜け目ないな。私としては、損さえしなけりゃそれでいいんだけどね。
迷宮都市に入るには、市壁の門で税金を払う必要がある。そのお金を用意するため、街道か門で出会った商人に、森で採取した素材の一部を買い取ってもらう予定だった。
ただしその場合、運が悪いと買いたたかれる。だから卵の殻だけは売らないようにと言われていたが、ここですべて片づくならありがたい。
「ついでに他の素材も買い取ってもらえます？」
「意外と抜け目ないな、嬢ちゃん」
言い出しっぺはクレフだけどね。私も賛同したけど。
「いいぞ。状態にもよるが、相場に少し色をつけてやろう」
「じゃあ、お願いします」
私はマントの陰で、【アイテムボックス】からトートバッグを取り出した。そしてそのバッグから、各種素材を取り出すふりをする。
「って、殻が丸ごとあるように見えるんだが？」

「はい。丸ごと一個分ありますよ」
「マジか。なら復元できるな。貴族に高く売れそうだ。ウサギのは上物の魔晶石だし、ヘビのは……半透明で少し色がある。魔晶石になりかけか」
無意識なのか、パルスさんはブツブツつぶやきながら、日本のと同じそろばんをはじく。
「全部で五千六百ルツ！　これでどうだ？」
えーと、クレフに教えてもらった物の値段から考えると、一ルツは確か、百円くらいだったよね。つまり……五十六万円⁉
「そんなにいいんですか⁉」
「ああ。殻は貴族に売るつもりだからな。魔晶石に傷はないし、薬草の質もいい」
驚く私にパルスさんはそう言って、クレフも頷いた。
「この品質に色をつけてなら、それくらいが妥当だろう。しかし、余裕があるわけではないぞ。迷宮に挑むためには武器や防具が必要だし、宿代や食費など、今後の出費は多い」
ああそうか。――働かなきゃ。

それから約三時間後。ついに私は、迷宮都市カグラにたどり着いた。
身分証を持っていない私が町に入るための税金は、仮の身分証発行代も含めて三十ルツ。
ハンターの身分証を手に入れて仮の身分証を返却すれば半額戻ってくるし、今後の仕事で出入りする時は格安の一ルツとなるが、初回は結構高い。それを、なんとパルスさんが出してくれた。

「成人祝いだ。ハンターの仕事、頑張れよ」
「……私、二十二ですよ？」
明かした年齢に、沈黙が落ちる。
「あー、若く見えるのは、いいと思うぞ。それよりギルドへ登録に行くなら、店が近くだから馬車で送ってやるよ。途中におすすめの宿もあるから、なんなら先にチェックインするか？」
しばらくして口を開いたパルスさんは、気まずさをごまかすためか、さらなる親切を発揮した。
なんというか、いい人だ。買い物は今後、ドレイク商会でしよう。

再び馬車に乗って、門の前を出発する。
クレフ曰く、この大きな壁と門は、迷宮で増えすぎた魔物があふれ出してきた際、町の中に閉じ込めて被害を抑えるための物らしい。その現象は暴走と呼ばれ、一国が滅びることもあるとか。
実際、百数十年前に魔道具が発明され、その動力源として魔宝石の需要が高まった結果、他国の迷宮を得るために戦争が勃発。それにかまけたせいで魔物の間引きがおろそかになり、暴走が発生して、滅びた国もあったらしい。バカだねぇ。
でもってそれをきっかけに、当時元の世界に帰っていなかった複数の渡り人が中心となって、どこの国にも属さないハンターギルドを創設。迷宮の管理権限を国からぶんどったそうな。
各国王家の威信と求心力は、それを機に軒並み低下しているというが、仕方ないよね。
そんな歴史のある町の一つ、迷宮都市カグラには、暴走が起きた時のために、門と同様、頑丈そうな建物がいくつかある。でも基本的には、木の骨組みがアクセントとなった明るい色の漆喰の家が多い。道には石畳が敷かれていて、童話の世界みたいな町並みだ。広場には綺麗な水の噴水まであるし、水が豊かで、上下水道が整備されているのかもしれない。
「ここがおすすめの宿、春風亭だ」
馬車が止まってパルスさんに案内された宿は、白漆喰の木造五階建て。一階は食堂になっているのか、開け放たれた扉から大勢の食事客が見えた。
「ここは小型の従魔なら、一緒の部屋に泊まれる宿なんだ。だから聖魔鳥も大丈夫だぞ」
パルスさんの言葉に「そうなんですか」と返しながら、私はチラリとクレフを見る。
「従魔とは、屈服させた魔獣に専用の首輪を与え、従わせた存在だ。主人であるハンターの責任において、行動を共にすることが許される」
察したクレフの説明に、私は小さく頷いた。解説、ありがとう。
早速中に入ると、カウンターに美女がいた。先のとがった少し長い耳の、金髪の美人さん。
「珍しい。エルー族と人族のハーフか」
クレフの言葉に、私はこの世界に存在する種族について思い出す。
この世界には、クレフが属する人族の他に、三つの種族がいるらしい。
風魔法と弓が得意で、先のとがった長い耳が特徴のエルー族。
平均身長が百センチ程度で、男はヒゲ面、女は童顔、指先が器用なワーフ族。
血を介した魔力の補給が可能で、不死のごとき回復力を持ち、怪力。魔法全般得意なヴァン族。

なんとなく、それぞれエルフとドワーフ、ヴァンパイアを彷彿とさせる種族だ。
ちなみに人族の寿命は百年ほどで、一番人口が多い。平均二百年ほど生きるワーフ族は人族より少なく、五百年以上のエルー族とヴァン族は、さらに少ない。
カウンターの彼女は、その希少な種族の血を引いているわけだね。
ついつい彼女に見とれて凝視した結果開いた【鑑定】ウィンドウにも、種族はハーフと表示された。あと、おなかは目立ってないけど妊婦さんである。
「女将、客を連れてきたぞ」
「あらあら、ありがとう。いらっしゃい、お嬢さん。あら、肩にいるのは聖魔鳥？　可愛いわぁ。聖魔鳥連れのお客さんなんて縁起がいいし、パルスさんの紹介だし、サービスしちゃう」
私の肩口を見て驚いた女将さんは、にっこり笑って宿帳らしきノートを開いた。
「一泊素泊まりは、前払いで三十ルツ。朝食付きなら三十五ルツなんだけど、三十ルツでどう？」
「よろしくお願いします」
「じゃあ、ここに名前を。文字は書けるかしら？　代筆する？」
「大丈夫です」
私がペンを持つと、クレフが大きな手で私の頭に触れる。少しして、頭の中に文字らしきもののイメージが流れ込んできた。
これは転写という魔法で、流し込まれた情報は反復しなければ忘れてしまうものの、手っ取り早く大量の情報を与えるには最適な魔法らしい。

私がクレフとの会話のために作った【音声翻訳】スキルは、あくまで会話用。スキルを作る際にうっかりしたため、文字は対象外だった。
そういえば、【見鬼】は人ならざるものと言葉を交わせるスキルだったはずだけど、【音声翻訳】を作るまでクレフの言葉を理解できなかったのは、なぜだろう。
女神のミスか？　なまじ自分が、そんなのなくても会話できるから……。うん、あり得る。
生まれる前のヒナちゃんの言葉が理解できたのは、ヒナちゃん自身の力かもね。
それはともかくとして、この世界には字を書けない人が結構いるらしい。でも書けたほうが渡り人だとバレにくいかと考えた私は、スキルを作ろうとしたんだけどね。クレフが必要に応じて魔法で教えてくれると言ったから、お言葉に甘えることにした。ポイント消費削減である。
私は脳裏に浮かんだギリシャ文字っぽいそれを、宿帳に書き写した。これでチェックイン完了。そのあとは再び馬車に乗せてもらって、町の中心にあるというギルドへ向かう。
クレフから教えてもらった情報によると、迷宮都市は大抵円形で、中央の迷宮前広場から放射状に道が広がっている。ピザのピースみたいな感じだ。その縦の道をつなぐように、横道がある。馬車は迷宮前広場までは行けないとのことなので、一つ手前の道で降ろしてもらった。
「知っているかもしれんが、広場には迷宮脱出用魔法陣が描かれている。利用者以外が突っ切るのは禁止されているから、歩道を歩けよ。ギルドはあれだ」
広場までついてきたパスルさんが指さした先には、レンガ造りの建物があった。入り口の上に、看板が掲げられている。たぶん、ギルドの支部名が書かれているのだろう。

そのギルドの正面、かなり広い広場を挟んだ反対側には、町を囲む外壁に負けず劣らず立派な門があった。そこから武装した人たちが何人か出てくる。広場の石畳に描かれた円形の幾何学模様からも、時々光と共に人が現れた。

「あの門が迷宮の入り口だ。広場の魔法陣は、脱出専用」

クレフの説明に、私は小さく頷く。目指すは、あの扉の向こう。その最下層だ。

「じゃあ、頑張れよ」

励ましの言葉をくれたパルスさんが、馬車に向かって歩き出す。私はお礼を言って、ギルドに向かった。

開けっぱなしの扉から、中をのぞく。ちょうど仕事を終えた人たちが戻ってくる時間帯だったのか、ギルド内は混み合っていた。

「新規登録受付は、あれだな」

言って、クレフが銀行の窓口に似たカウンターの一つを指さす。ちょうど手続きが終わったのか、三人組の少年たちがその窓口を離れた。私は前を横切る人々の合間を縫って、そこへ向かう。即売会イベントの人波に慣れているため、こういうのは得意だ。

窓口の前に立つと、ヒナちゃんを見た受付嬢が驚いた顔をする。けれどすぐに私に視線を移して、笑みを浮かべた。

「こんにちは。お仕事の依頼なら、隣のカウンターよ？」

「いえ、ハンター登録をしに来ました」

「あら、十六歳だったのね。ごめんなさい」

「いえ、二十二です」

未成年は、ハンターギルドに登録できない。私をギリギリ成人と間違えた受付嬢は、しばらく沈黙したあと謝罪した。

こうも間違われると、めんどくさいから十六歳ってことにしてしまいたくなる。でも六歳もさばを読むのは、ちょっと抵抗があるんだよね。

内心ため息をつきつつ、登録用紙に名前などを書き込んだ。年齢は、やっぱり二十二とする。

人間、正直が一番よ。偽名を使っといてなんだけど。

「身分証を発行しますので、少々お待ちください」

ギルドカード発行手数料を添えて提出すると、受け取った受付嬢はそう言って、書類を金属製の箱のスリットに差し込んだ。続いて付属の水晶玉に触れると、それがかすかに青く光る。そして、箱の下からドッグタグみたいな銀色のプレートが出てきた。

受付嬢はそのプレートにシルバーチェーンを通し、針と一緒にカウンターに置く。

「お待たせいたしました。こちらがハンターの身分証です。あなたの血を一滴つけて、最終登録をお願いします」

血か。痛いのは嫌だけど、仕方ない。

私は左手の小指を軽く刺し、ぷっくり出てきた血をプレートにつけた。一拍おいて、金属がうっすら青い光を放つ。すると、血が金属に吸い込まれるようにして消えた。

「登録が完了しました。身分証は首から提げて、肌身離さず所持してください」
私が言われた通りにそれを身につけると、受付嬢は再び口を開く。
「ハンターのランクはFから始まります。掲示板に張り出されている依頼票には推奨ランクが書かれており、受注可能なのは自分のランクの一つ上まで。Cランクまでは、上位ランクの依頼十個達成で、そのランクへ昇格します」
「標的外の魔獣と遭遇した場合は？　二つ以上ランクが上のとか」
「討伐可能であれば討伐し、魔石など証拠になるものをギルドに納品してください。ランク差によっては、数ランク昇格することもあります。ですが無理はしないでください。どのランクでも、受注した依頼の失敗には違約金が発生しますし、続けば降格となりますので」
無理をした結果の昇格は、その後の苦労につながるのね。
「それから神聖教会にも所属すると、あちらでの仕事――悪霊討伐なども、ギルドのランクに反映されます。ただ、悪霊は討伐後に残る核を調べないと、正確な強さが分かりません。ですので推奨ランクがなく、誰でも討伐依頼の受注が可能ですが、リスクが高いことをご承知ください」
「悪霊討伐の依頼は、教会に所属しないと受けられないんですか？」
「ギルドに依頼があれば、可能ですよ。それと遭遇戦なら、所属は関係ありません。話を戻してCランク以上の昇格ですが、依頼の達成数の他に、戦闘試験があります。そしてAランクより上のSランクに至るには、複数のパーティーで狩るSランクの敵を、少人数のパーティー、あるいは一人で狩るなどの偉業が必要です」

立ち読みサンプルはここまで

「Sランク、いるんですか？」
「ええ。当ギルドにはお一人」
それはつまり、単独で討伐したってこと？　それともその後、パーティー解散でお一人様に？
「なお、迷宮探索はランクに関係なく、探索許可試験に合格すれば可能ですが、受験するには討伐ポイントを貯めていただく必要があります」
「討伐ポイント？」
「魔獣などを討伐した際、ギルドから付与されるポイントです。対象は依頼の案件でなくてもかまいません。ある程度戦えなくては、第一階層に多いスライムやゴブリン相手でも危険ですから」
受付嬢の説明を一緒に聞いていたクレフが口を開く。
「死者が出れば、それを取り込んだ迷宮が成長し、魔物も増えるからな。私の体は時間停止魔法のために吸収できず、迷宮核の間に残っているだろうが……。魔物が装備できるものでもないし」
装備してたら、逆に怖いわ。
思わず、そう心の中で突っ込む。
それにしても、なるほどねぇ。今は魔道具の動力源として狩られている魔物だけど、本来は暴走抑制のために減らすのだ。無駄に人材を失った上に、暴走発生のリスクを上げるわけにはいかない。ポイント制度と試験で篩にかけるのは当然か。
受付嬢は迷宮入りにランクは関係ないと言っていたけど、討伐ポイントを貯める関係上、試験を受ける時にはランクアップしているだろう。実質、Fランクの人はいまい。